
IS ~ロスト・エヴォリューション~

雅太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（ロスト・エヴォリューション）

【Nコード】

N4723Z

【作者名】

雅太郎

【あらすじ】

デジタルワールドで、急にデジモンたちの進化が失われてしまった。そんな中、現実世界ではISを乗れる男性が二人も現れてしまった！？しかも、その片方はパートナーデジモンを持つテイマーであった！

二つの世界が動くとき、新たな物語が始まる！！

0：崩れ始める世界（前書き）

ついつい早く原作が書きたくなり書いてしまいました。

0：崩れ始める世界

デジタルワールド。

それは、デジモンと呼ばれる生物が暮らすもう一つの世界。

デジモンは己を鍛え、自らを進化させることで新たなデジモンとなり強くなってきた。デジモンには、進化の段階があり、幼年期↓成長期↓成熟期↓完全体↓究極体と進化していくのだ。

だが、ある日を境にデジモンたちは急に進化ができなくなってしまうった。

原因は不明であり、誰もが進化できずに困ってしまっていた。

いずれは、無理にでも進化しようと多くのデジモンたちが殺しあい、データをロードしあうだろう、そうしてしまったら、デジタルワールドは崩壊に繋がってしまう可能性だってある。

だが、そんな中、一人の少年が現れた。

デジモンを信頼し、信頼させ、パートナーデジモンを持つ少年。

少年のパートナーデジモンは、こんな仲でも少年の持つ聖なるデバイスであるデジヴァイスを使い、進化させることができる。

そんな少年のような人を、デジタルワールドでは『ティマー』と読んでんだ。

1：入学

右を見る…あるのは、こっちを興味深そうに見る視線ばかり。……
左を見る…あるのは、右側のときと同じく視線ばかり。…前を見る
……クラスの半数近くの視線だけ…
頼りになる相棒には今は会えない。……これはキツイな…
何で俺はここ…IS学園にいるんだ？

IS学園とは、IS…正式名称は『インフィニット・ストラトス』
というマルチフォーム・スーツを学ぶ学校だ。ISは、既存の兵器
を凌駕する性能を持つ、とある天才が造った兵器だ。だが、ISに
は大きな欠点がある。それは、女性にしか反応しないのだ。だから、
IS学園は女子校なのだ。
…そう本来ならば。

「えっと…織斑^{おりむら} 一夏^{いちか}です。」

つと、現実逃避はこの辺にしておくか…
ここでの唯一の救いが、もう一人男がいることだ。そう、今自己紹
介をした織斑のことだ。

「えっと、その……………以上です！」

瞬間、女子たちがこけた。

正直言うと、俺もこけそうになった…クラスの後ろの席にいる俺が

らでも解るくらいに、クラスメイトたちはもつと言え、と言つ視線を送つてたのは解つた。なのに……あれはないだろ……

――ズビシッ！

「アガッ！？」

「織斑。貴様、自己紹介もまともに出来んのか」

「げ、げえっ！？か、関羽！！」

――ズビシッ！

「誰が三国志の名将だ」

2度も振り下ろされる出席簿……あの音は、出席簿からでていい音なのか？

そして、俺の本能が告げている……あの人に逆らえば、殺られる！？

「ち、千冬姉！？な、なんで……」

――ジビシャッ！

「ここでは織斑先生と呼べ。諸君、私が織斑おりむら 千冬ちふゆだ。飛ぶことの出来ん、ひよっこである君たち新人を1年で使い物になるように育てるのが私の仕事だ。返事はYesかはいで答える」

担任のありがた〜いお言葉……これ、最後の反論の余地ないよな？普通ならきつと、反発があるんじゃないや『キャ〜〜〜！！！！』……えっ？

「本物の千冬様よ〜！」

「私、ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてきました！」

……何？このクラスは……入学して、自己紹介の時点で帰りたくなつたのは、初めてなんだが……

「はあ…何で私のクラスはこんな奴等ばかりなんだ…」

それはきつと学園側の陰謀だと思いますよ？きつと。

「ち、千冬姉？どうしてここに…」

「……ズドンッ！」

「織斑先生と呼べ」

さつきから織斑どれだけ叩かれてんだよ？あれじゃ、脳細胞が死にすぎじゃねえか？

つて、さつきから「姉」つて？

「もしかして、織斑君つて千冬様の弟？」

「織斑君がISに乗れるのも、それが関係してるのかな？」

へえ、織斑は”あの”織斑千冬の弟なのか？

織斑千冬、ISの世界大会の第1回モンド・グロッソに日本代表で出場し、総合優勝。ブリュンヒルデの称号を持つ世界最強のIS操縦者だ。だけど、第2回のモンド・グロッソでは途中で危険してから引退してたけど、IS学園で教師をやってたのか。

「まあいい、もう一人の男子。自己紹介をしろ」

「…はい」

席を立ち上がると、このクラス全生徒からの視線を浴びる。

相棒、助けてくれよ…

『いや無理だつて』

何故か幻聴で相棒の声が聞こえた気が…

幻聴なら、せめてはげますような幻聴が聞こえてほしいよ…

「えつと、咲坂 誠さきざか まことです……」

「それで終わりじゃないだろうな？」

「ッ！？趣味は探検。特技は、ISの武装造りです！よろしく願
いします！」

不意に織斑先生に睨まれて、背筋に冷や汗をかく。
もういや…この学校…

2：もう一人の男（前書き）

やっと誠のパートナーデジモンが次から出せるぜ…

2：もう一人の男

「はあ…」

1時間目の授業が終わり、休み時間に入った。

あれから、自己紹介も直ぐに終わってしまい、休み時間に入ったのだが…

周りは、クラスメイト以外にも他のクラスや他の学年の生徒が見に来ている…誰か助けてくれよ…

「な、なあ？」

「ん？」

俯いていた顔を上げると、其処には俺の苦痛を分かち合えるもう一人の男、織斑 一夏がいた。

「えっと、咲坂でよかったっけ？」

「ああ、そうだぜ。そんなお前は、織斑であってるよな？」

「ああ。っと、俺のことは一夏でいいよ」

「そっか。なら一夏、俺は誠でいい」

まさか、一夏の方から話しかけられるとは思わなかった。

本当は、昼休み当たりに話しかけに以降と思っただがな。

「わかった。それにしてもよかった…俺以外に男がいてくれて…」
「ははっ、さすがにここに男一人はきついからな…想像しただけでストレスで死ねる…」

「まったくだ…」

一夏も俺と同じ事を思い浮かべたのか、苦笑している。
あれ？一人のクラスメイトが近づいてくるが…なんだ？

「少しいいか？」

「ん？…お前、箒か？」

「一夏、知り合いか？」

「ああ。幼馴染だよ」

箒、と呼ばれた女生徒を見る。

ポニーテールにしてある黒髪に少しつりあがった眼つき、凜としていて抜き身の刃のような印象を持てる。確か…篠ノ之^{しのの} 箒^{はつみ}だったな

「咲坂。一夏を借りるぞ？」

「おう。ごゆつくり」

「解ったよ、箒。それじゃ、誠。また後でな」

篠ノ之さんが一夏の手を引いて去っていくのを、軽く手を振って見送る。

さて…何するか…久々に続きでも考えるか。

俺は、カバンの中から一冊のノートを取り出し、一番新しいページを開く。

「……やっぱりこの武装に射撃武装を加えるとなると、近接装備自体の重量が増えて大剣では振り回しづらくならないか？なら、ここ

は大剣よりもショートソードくらいのサイズなら……」

「ね、ね、さつきー？さつきから何言ってるの？」

「ん、君はクラス……」

「私は布のほとけ仏ほんね 本音だよ」

ISの武装造りに熱中していると、俺の目の前にぶかぶかの制服を着た女性徒が立っていた。

ぶかぶかで袖が見えず、眠たそうにしている眼や雰囲気から何かこつちものほほんとした雰囲気を持つ少女だ。

「本音ね。で、さつきの質問の答えだけど、ISの武装の開発だよ。まだ理論の段階で考えてるけどな……」

「へえ、さつきーってホントにISの武装が造れるんだ」

「ガセかと思われてたのかよ……って、さつきーって俺のことか？」

「うん」。咲坂だから、さつきーだよ

「にやろ……なんか俺だけあだ名って負けた気がする……なら、俺がさつきーなら本音はのほほんさんだ！」

「やった！さつきーからあだ名貰った」

子供のように無邪気に喜ぶのほほんさんを見て微笑ましく思う。しかも、一つ一つの動作がのろいせいか、凄く和む。……これが、癒し系なのか？

……キーンコーンカーンコーン

「あ、チャイムだ。それじゃ、私は席に戻るね」

「あいよ……って、席隣じゃないか」

「そうだった、てへへー」

眼を細めて頭を小突くのほほんさん……うん、可愛い子だな。

* * *

2時間目は、副担任の山田^{やまだ} 真耶^{まや}先生によるISの基礎知識の授業だ。

正直、基礎過ぎて暇だな…俺は、兄さんがISの研究をしてたんでその影響でISの基礎はよく知ってるし、他の人たちもちゃんと学習してあるみたいだから、解らない奴はいないだろ。

「織斑くん？どうかしましたか？」

「えっと、その…」

一夏がなにやら挙動不審だが、一体どうしたんだ？
まさか、解らないところでもあったのか？

「織斑くん、何でも質問していいんですよ？なんってっただって私は先生なんですから」

「じゃあ……はい」

「はい、織斑くん」

「…全く解りません」

「へ？」

「……ズゴオオオオツ！！」

一夏の「解りません」宣言に俺を含むクラスメイトたちは、机から転げ落ちてしまった。

おいおいおいおい…全くって…そりゃ無いんじゃないのか？

「織斑、貴様入学前の参考書を読んだか？」

教室の隅で腕を組んでいた織斑先生が、一夏に問いかけをする。
一夏は、少し考えた素振りを見せるときっぱりと告げた。

「古い電話帳かと思つて捨てました!」

――ズバンツ!

「必読と書いてあつただろうが!」

あゝあゝ普通、必読と書いてある本を捨てるか?

再発行してくれるらしいけど、一週間であれを覚える何て鬼畜だろ……
そうしている内に、2時間目の授業が終わつたのだつた。

* * *

2時間目が終わつた瞬間、一夏が俺の机の前までやってきた。

「な、なあ誠。お前は、あの授業の意味……解つてたのか?」

「ん? ああ、さっきの授業ね。解つたぞ。俺は、兄さんがISの研究をしてたんで俺もついでにISについて習つてたからな」

「……それって、何時の頃だ?」

「えつと……8歳くらいかな? 兄さんがISの発表があつた1年後くらいから研究してたし」

俺がそう応えると、一夏は「8つの頃から……」と、呟いた。

まあ、俺は他と比べて特殊だからな。

「なあ! 俺にISについて教えてくれ、誠!」

「すまんが……OKだ」

「そつか……やつぱ駄……って、いいのかよ!? なんでOKする前に謝つたんだよ!」

一夏、それはノリだよ。
何気にお前は、ツツコミのセンスがあるからな、ついついからかい
たくなるのさ。

「そんじゃ、放課後から居残りでやるぞ。ただし、俺の授業は厳し
いぞ?」

「はは、やってやるぞ」

* * *

放課後になると、一夏は燃え尽きていた…

「おい、一夏?」

燃え尽きている一夏に話しかけると、ISについての恨みなどを呟
いている。
いや、確かに難しい内容だけど、だからってIS自体に恨みを呟く
なよ…

「あ、織斑くんに咲坂くん。教室に残ってたんですね?」

「あり?山田先生?」

「ど…どうかしたんですか、山田先生」

俺と一夏しか残っていなかった教室に、山田先生が入ってきた。

のだが、山田先生が入ってきた時に扉が開いたが、その先には無数
の女性徒が…ここは上野動物園か!?

俺たちは、ここでは檻に入ったパンダ扱いか!?

「寮の部屋が決まったので、その鍵を渡しに来たんですよ」

俯きながら、こつちをチラチラと見て話す山田先生を見ると、この人は男性に慣れてないんだな、と解った。

ただな、一夏。お前はさつきから、ちよくちよくどこを見ているんだ？確かに山田先生の胸は、一般の女性より大きめだが、女性の胸を意識して見るのは変態だぞ？

「こつちの1025号室のが織斑くん、1001号室のが咲坂くんですよ」

「俺が1025で、1001が誠か。結構、離れちまってるな」

「まあ、男が二人そろって何か悪巧みされるのでは？とか意見があったんだろ」

確か、寮って基本数字が若い順に出入り口とかに近いから、ありがたいな。

1001なんて、一番若いだろ。

「そうそう、咲坂くん。織斑先生が、寮で何か遭ったら連絡するかお前が解決しろ」って行っていましたよ」

「……なして俺が？」「なんで誠が？」

「それは、元々1001号室は寮長室だからだ。そして、1年の寮長は私だ。せつかく部屋をお前に渡すんだ、代わりに寮長の仕事もやってもらおうかと、思ってたな」

「お、織斑先生……」「ち、千冬姉……」

……スパーン！

一夏の頭に、またもや必殺の出席簿が命中し悶絶していた。

と言うか、この人……俺たちが気付かないように、わざと気配を消して来たな。

と、言うか！

「織斑先生！なんで、俺が寮長の仕事をしなくちゃいけないんですか！？」

「仕方ないだろう。一人部屋は、私の寮長室しか空いてなかったんだ。そして、私が移動するのは職員用の宿舎だ。そこでは、寮長の仕事は出来ん。だが、お前を見知らぬ女性徒と相部屋にするのも、織斑が寮長をするのも不安だな。これが、せめてもの妥協案だ」

「ぐっ…確かに…」

「おまけに、お前の中学の職員の方から話を聞く限り、素行もいい。ならば、お前に任せてもいいだろうと私は判断しただけだ」

「はぁ………解りましたよ、やりやあいんでしよう！」

「潔いのはいいが、教師には敬語を使え！馬鹿者が！」

「……スパーン！」

織斑先生の出席簿が、俺の頭に命中した瞬間、俺は意識を失った。

こんな痛みを味わって、よく一夏は無事で……いられ、るな……

「知らない天井だ…」

眼を覚ますと、そこはホテル顔負けの豪華な部屋のベッドの上だった。

あれ…ここどこだよ？

とりあえず起き上がり、辺りを見渡すと机の上に俺のカバンと1枚の紙が置いてあった。

「誠へ

これを読む頃には、もう眼を覚ましてるだろ？

とりあえず、言って置くけどその部屋は、お前の部屋だ。

千冬姉の出席簿一（凶器）による一撃で気絶したんで、悪いけど勝手に上がらせてもらった。

で、千冬姉からの伝言だけど、俺たち男は大浴場の使用は禁止らしい。ほら、女子の前や後に風呂はいるのはどうかでな。だから、しばらくは部屋のシャワーを使えって。

後、部屋はちゃんと業者の人が掃除済みだから、気にせず使えって言ってた。

初日で色々あったけど、お互い頑張ろうぜ！

P S 俺の部屋には、いつでも遊びに来ていいぜ！

一夏より」

一夏には、色々と感謝しないとな。

きっと、気絶した俺をここまで運んでくれたのは一夏だろう。

寮までは、50mしか無いとは言え、一人運んだんだ。きっと、大変だったに違いない。

明日、何か一夏におごってやろう。そう決心する俺であった。

3：パートナーと寮長の初仕事（前書き）

算の喋り方ってこれであってたっけな？
と、思いつつも投稿します。

3：パートナーと寮長の初仕事

一夏の書いた手紙を、折りたたみ机の上に置いてから、今日まだパートナーのあいつと会ってない事に気付いた。

はあ…あいつはよく外に出たがるし、このまま放って置いたら、絶対後で何か文句言われるだろな。

なので、仕方なくあいつを外に出してやる事にした。

「はあ…リアライズ」

ベルトに取り付けておいたデジヴァイスを手を持ち、そう呟く。すると、デジヴァイスの画面から光があふれ出る。その光は、徐々に人型に近い形になっていく。

光がおさまると、そこには青い肌に子供に近い体型をし耳と尻尾をはやした小さな竜がいた。

「やつつつつつつと！！出られた〜〜〜〜！遅いぜ、誠〜」

「仕方ないだろ、ブイモン…こっちは全寮制の学校で、お前が付いてくるって言っただから？」

「でもよー。ずっとデジヴァイスの中じゃ、疲れちまうぜ〜」

こいつの名前はブイモン。俺のパートナーで、デジタルモンスター

ー（略してデジモン）と呼ばれる生き物だ。

デジタルワールドと呼ばれるネットとかに存在する世界の生き物なのだが、こうやって現実世界リアルワールドに実体化も出来る。

そう言えば、ブイモンと出会ってもう12年経つんだよな。

俺が3歳くらいの頃だったか、兄さんのパソコンを俺が遊び半分でいじってた時、パソコンからデジタマって言う卵が出てきてコイツが生まれたんだよな。そのときは、チコモんって言う幼年期のデジモンだった。

ちなみに、デジモンには、幼年期↓成長期↓成熟期↓完全体↓究極体と姿を進化させる習性を持っている。ブイモンは下から2番目の成長期のデジモンだ。

さて、ここでさっきブイモンを召喚したときに使ったデジヴァイスの紹介をしよう。

デジヴァイスは、デジタマからチコモんが生まれたと同時にデジタマの殻がデジヴァイスとなって出来たんだ。

デジヴァイスは、パートナーのデジモンを進化させる働きや闇を浄化できる能力、パートナーデジモンの収納する事が出来る。最近、デジタルワールドではデジモンが進化する事が出来ないって言う異変が起きてる中、デジヴァイスを使えばパートナーを進化させることが可能なんだ。

そして、デジヴァイスでよく使う機能がパソコンなどからデジタルワールドに繋ぐ扉ゲートを開く事ができる。俺は昔からこの機能を使って、デジタルワールドを探検してたしな。

デジヴァイスの機能はこんな所か。

「なあ誠、俺ハラ減っちゃったよ」

「はいはい。カバンの中に、菓子が入ってるからそれを食べてくれ」

「あいよー………っと！う。い棒だ！しかも、たこやき味！」

ブイモンはこれで放っておけばいいだろう。

さて…っと。簡単なキッチンもあったし、冷蔵庫の中に何か入っていないか？

……まったく、入ってないし。仕方ない、食材に関しては明日織斑先生に聞くか。

はあ……今日は、軽く予習して寝るか。ブイモンは菓子を食べるのに夢中だし。

そう思い、机に向かおうとした瞬間だった。

- - - プルルルル！プルルルル！

「な、何の音だ！？」

「で、電話みたいな音だが…」

不意に電話が鳴る音がして、俺とブイモンは驚いた。

冷静になって音の元を探してみると、脱衣所に入るドアの横に電話が取り付けられていた。

コレから電話の音になったんだな。

正体も解り、直ぐに電話を取る事にする。

「はい、もしもし」

『えっ！？……そ、その声って咲坂くん！？』

「あゝ…うん。そうだよ」

『な、なんで寮長室に咲坂くんが！？』

「まあ…色々とあって今は寮長代理なんだよ」

織斑先生…寮長代理について誰にも言ってなかったんですか…

もし寮長代理で、反発があったらどうする気ですか……

などと頭を抱えつつ、寮長室に電話してきた子から話を聞くことにする。

「それで…寮長室に電話してきたって事は、何かあったの？」

『あ…その、ゴメンね？ちょっとお隣が五月蠅くて…』

「了解。其処は何号室？」

『その…1025室です…』

「それじゃ、俺が何とかしておくから安心してくれよ？」

『う、うん…ありがとね、咲坂くん』

電話を切ってから、ブイモンに出かける事を告げる。

それから、1025室に向かうが、1025…アレ？確か、何か聞いたことがあるような…

とりあえず、そこに向かって歩いてみると…何故か、女性徒たちの群れが出来ていた…何コレ？

と言つか皆さん？ラフ過ぎませんか？ここには、男の目もあるんですよ？一応…

「あゝ！咲坂くんだゝ！」

「はあ…悪い、少し通してくれ。1025室に用があるんだ」

そう言つと、女性徒たちが道をあけてくれる。

これで通れる！と、思ったのだが…道は途中で途切れていた。

「箒〜！頼むから開けてくれよ〜！」

「何やってんだ…一夏？」

「あつ、誠！」

何か一夏が、飲み会に付き合つたから夜遅く帰ってきて閉め出されたサラリーマンに見えた。

「いや、俺はサラリーマンじゃねえし！」

「勝手に人の心を読むなよ！お前は読心術でも使えるのか！？」

「普通に声に出して喋ってたぞ！！」

あれま、失敗したか。ってか、思い出したな。

1025って、一夏の部屋じゃないか。

まあ、お遊びはこれくらいにして、仕事するか。

とりあえず、一夏をほつといて1025の部屋をノックする。

「すみません。少しいいですか？」

「……なんだ？」

1025号室のドアから出てきたのは、不機嫌な顔をした篠ノ之だった。

そうか、この部屋は一夏と篠ノ之の相部屋だったのか……今思ったが、常識的に考えてやばくて？

年頃の男女が同じ部屋だし……まあ、織斑先生もいるから大丈夫か？

「篠ノ之もこの部屋だったのか。悪い、少し俺と一夏を入れてくれないか？話があるんだ」

「…………入れ。一夏もだ」

「サンキュー。おい、一夏。凹んでないで、早く戻って来い」

ずつと一夏の事を無視してたのか、一夏は凹んで体育座りで落ち込んでいた。

中々戻りそうも無く、一夏の襟首を持って1025号室に入ることにする。

「それで、話とはなんだ？」

「悪い。そのまえに一夏を正気に戻すから、それまで待ってくれ」

「解った。なら、そこを退け」

「へ？……ああ」

今だ落ち込んでいる一夏を正気に戻すために何とかしようとするが、篠ノ之に一夏の前を退くように言われる。

そう言えば、一夏と篠ノ之は幼馴染だったな。なら、この状態の一夏を正気にも戻す方法を知ってるだろう。

そう考えてると、篠ノ之は何故か竹刀を構え始める……えっ？

「面ッ!!」

――パンツ!

「痛ってええええ!!?」

竹刀を構えた篠ノ之は、そのまま一夏の額目掛けて竹刀を振り下ろした。

……なあ?竹刀って防具も付けてない奴に使っても平気なのか?

「あ、あれ?俺は何してたんだ?って、誠!部屋に来てたのか!?」

「って、戻ってるし!?」

「一夏は他の奴と比べて頑丈だ。この程度、どうってこと無い」

そ、それもそうか…一夏は、今日何度織斑先生の出席簿をくらったことやら……

俺の場合は、一撃でノックダウンだったぞ…

*誠の場合は、当たり所が悪かったです。

「ま、まあ、一夏が正気に戻った事だしいいか。…さて、一夏と篠ノ之に言わなくちゃいけない事がある」

「どうしたんだ、誠?急に部屋に来て、言わなきゃいけないことって?」

「言わなければいけないこと、とは何だ?咲坂」

「簡単な事だ。二人がさっきの騒動を起こしたせいか、この部屋の隣に住むことになった子から苦情が来た。だから、大人しくしてく

れ」

「む…それはすまなかった。だが、何故それを咲坂が言うのだ？ 普通は、寮長がやるものだろう？」

「あ…そう言えば、誠は寮長代理だったな」

まったく…織斑先生には困ったものだ。

寮長代理に任命してきた上に、いきなりこんな騒動が起こるんだからな…もしかして、一夏が何かするだろうと思って俺に寮長代理を任命したのか？

「待て。何故、一般生徒であるお前が寮長代理をやっている？」

「いや、部屋がまだ調整中でまだ空いてないらしくてな。それで、俺は寮長室である1001号室に住む事になったんだ。そしたら、ここの寮長の織斑先生から寮長代理に任命された…」

「そ、そうか…まあ、頑張れ」

「ああ、ありがとう。さて、話を戻すが、ここの防音設備は完全に音を遮断する訳じゃないんだ。結構大きな音だと隣に聞こえるらしい。だから、周りに迷惑をかけないためにできるだけ大きく騒がないでくれ。でないと、俺も織斑先生に連絡する事になるし…」

「そ、そうか…悪かった……」

寮長室に置いてあった部屋のマニュアルを持ってきておいてよかったな。

というか、お前等…土下座してまで、織斑先生を呼ばれるのは嫌か！？

「ま、これから気をつけてくれ。一応、俺が解決してくつもりだしな。二人は、他に決める事があるだろ？ 邪魔者は退散させてもらうぜ」

「ああ。また明日な、誠！」

「今日はすまなかつたな、咲坂」

一夏と篠ノ之の部屋を出てから、集まっていた生徒たちを解散させる。

そう言えば、この部屋のドアが穴が空いてたな…はあ、明日織斑先生に新しいドアも注文しないとな。

部屋に戻ると、ブイモンは既に眠ってしまったていた。

さすがに今日は、もう何もしたく無くなったのでシャワーを浴びて直ぐに寝ることにした。

3：パートナーと寮長の初仕事（後書き）

オリジナル設定として、寮室には寮長室に繋がる電話が1つ取り付けられている設定です。

キャラクター紹介

咲坂 誠さきさか まこと

一夏より少し背が低い、この作品の主人公。
別に転生したとか、憑依したとかは無い。専用機持ち。

性格は、結構あっさりしていて、人付き合いはいい。そういう面では、一夏と似ている為一夏とは仲がいい。

家族構成は、父親と母親。兄はいたが、両親が理由で一度別居していた際に死亡。兄の死がきっかけで、両親は互いに助け合わなければと思い、和解した。元々、小さなすれ違いで離婚していただけだった。また、兄は母親に引き連れられ、母親の旧姓である「轟とんぼり」を名乗っていた。

恋愛経験は無く、今まで人を好きになる事はあっても、あくまでlikeのためloveになっただけは無い。また、そのためか結構

鈍感な部分がある。

趣味として、ISの武装を考えてることがある。それは、自身の専用機に使える武装を考えているからである。

パートナーデジモンは、ブイモンである。

デジヴァイスは、デジモンアドベンチャーに出てきた初代デジヴァイスの形をしている。ただ、機能は02とセイバースの機能も加わっている。

容姿は、アドベンチャーの八神^{やがみ}太一^{たいち}を高校生にした姿。トレードマークとして、ゴーグルを着けている。

ブイモン

誠のパートナーデジモン。

幼い頃の誠がパソコンをいじっていた時に、パソコンからデジタマが現れ其処から生まれた。

幼い頃から一緒だった為、誠との仲はかなりいい。
ブイモンの存在を知っているのは、誠と兄だけだった。

性格は、陽気で負けず嫌い。デジモン同士で戦う時、その負けず嫌いが発揮し、最後まで諦めない。

4：宣戦布告

翌日、1時間目の授業を終えると俺は一夏の席の近くに来ている。

「はあ…また来てるよ」

「仕方ないだろ、一夏…しばらくそつとして置くのが吉だ…」

毎時間、授業が終わると俺と一夏の周りに生徒はいなくなり、教室の扉には他のクラスの生徒に他学年の先輩たちまでもが俺たちを見に来ていたよ…

はあ…本当に早く普通になって欲しいぜ…

「ちよつとよろしいかしら？」

俺たちの真横（俺は一夏の真ん前にいる）から声が聞こえる。

振り向いてみると、金色の髪に先の方の髪が少しロールした女生徒が立っていた。ただ…この女性徒からは、今時の女の雰囲気があるな。

「聞いてますか？」

「あ、ああ。聞いてるぞ」

「まあ！なんなのかしらそのお返事は！わたくしに話しかけられただけで光栄ですのに、その態度はいただけませんわね」

訂正。雰囲気じゃなくて、この人は確実に今時の女だ。

ISの発表により、女性〓ISに乗れる〓偉い、って言う考えの持ち主だな。

はあ…めんどくさいな…

「（ひそひそ）なあ一夏。この人の話、引き受けてくれないか？」

「（ひそひそ）俺だって嫌だよ。こう言うタイプの女子は苦手なんだ…」

「（ひそひそ）それは俺だって同じだ…」

「ちよっと！人が話しかけているのに、何小声で話しあってますの…！」

目の前の女性徒によって、俺と一夏の作戦会議（？）は中断してしまふ。

はあ…ホント、こう言う人はめんどくさくて嫌だ…

「悪いな。俺たちは君のこと知らないんだ」

一夏が相手を刺激しないように、無難に声をかける。

一夏の顔を見ると、普段の人のよさそうな顔が少し困ったように見える。一夏もこういった女が苦手なんだな…すまん。

「知らない！？知らないですって！！このわたくし、セシリア・オルコットの事を！！？イギリスの代表候補生にして、学年主席のこのわたくしを！？」

まさか、あんな無難な質問にこんな罠が仕組まれてたとは…
って言うか、この人。代表候補生なのか…

「悪いな。でも、学園に入った2日目じゃそう言ったことを知ってる人は少ないと思うぞ?」

「ですが、少なくとも代表候補生であるわたくしを知って置くべきではないかしら?」

「確かにそうだけど、さすがに各国の代表候補生を全員覚えてる人は少数だろ」

「あ、質問いいか? 誠」

俺が、オルコットと穏便に話し合っていると、急に一夏が質問してくる。

あれ? 何か、判らないことでも言ったか?

「ん、なんだ?」

「あなた! このわたくしを差し置いて、その男に質問しますの! ?」

「…代表候補生って、何?」

瞬間、世界が止まった気がした…

まあ嘘だけだな。世界は止まらなかったが、オルコットは止まっている。

周りを見れば、クラスメイトの一部がずっとこけてるな…まあ、仕方ないか。

「一夏…お前ってやつは、そんな事も知らないのかよ…」

「し、仕方ないだろ! 俺の場合、千冬姉が色々あって俺をISから遠ざけてたせいで何にも知らないんだからよ」

「けど、新聞読んでりゃ解るだろ…簡単に言えば、国の代表の一步前だ」

「つまり、エリートって訳ですわ! !」

「うわっ! ?」

さっきまでフリーズしていたオルコットが急に大声ですから、驚いてしまった。

すまん、一夏…俺がオルコットを目覚めさしてしまったようだ…

「本来なら、わたくしの様な選ばれたエリートと、同じクラスになるだけでも幸運ですの。少しは、その現実を理解できないのかしら？」

「そうか、それはラッキーだ」

一夏よ…その言い方は、馬鹿にしてるとしか思えないぞ…

まあ、確かに代表候補生と同じクラスになれるのは、少しは幸運だと思うがな。

「ッ！馬鹿にしていますの？」

「いや、俺も一夏もラッキーだっと思ってるって」

「大体、あなたたちはよくISについてよく知らないでこの学園に入りましたわね。そっちの咲坂とかいう男性は、まだISについて知っているみたいですけど、それでも素人に毛が生えた程度の知識。男性でISが操縦できると聞いてましたが、とんだ期待はずれですわ」

うわゝ、なんかこの人勝手に自己解釈＋自己完結しちゃってるよ。

と言うか、俺はISに関する知識ならあんまし負けてないと思うぞ？

「いや、俺に何かを期待されても困るんだが…」

「まあでも？わたくしは優秀ですから、貴方方のような人間にも優しくしてあげますわ。ISについて「解らないのでしたら、泣いて頼むんでしたら教えて差し上げますわ。何せわたくしは、入試のときに唯一教官を倒すことがエリート中のエリートですから！」

へえ、入試で教官を倒したのか。

代表候補生なら、専用機を持つてる可能性があるから、機体の性能さでできるだろうな。

まあ、さすがに教師が本気を出す事は無いだろうけど...

「なあ、誠。入試ってあれか？ISに乗って戦う奴か？」

「いや、なんで俺に聞く？俺は、お前がISに乗れるって知られてから、政府が他に乗れるんじゃないか？って事で調査されたときに発覚したから、急で試験受けてないから知らないぞ」

「貴方は、何故その男性にしか聞かないのですか！？それに、入試はそれ以外ありませんわ！！」

「あ、なら俺も倒したぞ」

「へ？」「は？」

今、一夏の奴何て言った？俺も倒した、って言ったのか？
もしかして一夏は、かなりの大物なのかもしれない。...まあ、ブリ
ュンヒルデの弟だから、元々大物化...

「わ、わたくしただだと聞きましたわ...」

「それ、女子では、ってオチじゃないのか？」

「ちょ、一夏！それ火に油ッ！！」

「貴方！貴方も教官を倒したって言いますの！！」

...キーンコーンカーンカーン

「次の時間もまた来ますわ！！」

一夏が火に油を注いだのに、直ぐにチャイムが鳴ってくれてなのか
助かった...

はあ...余計な火種を生み出さないでくれよ...

「そんじゃ、一夏。俺も席に着くわ」

「あ、ああ」

そして、次の織斑先生の授業が始まった。

織斑先生の授業は、他の先生方の授業と違い、生徒全員がピシッと背筋を伸ばして受けている。

これはあれか？織斑先生の持つ凶器（出席簿）による支配の力な――ガッ！

「あだっ！！？」

「おい、咲坂。貴様、何か失礼なことを考えていたな」

「だ、だからって普通、チョーク投げますか……」

「普通？そんな事、私には関係ないな」

さいですか……つまり、この人の前では一般常識なんて関係ないという事です――ガッ！

「~~~~~ッ！！！」

「貴様は学習能力が無いのか……？」

もう一発、チョーク投げを食らうはめになった……この人は、心を読めるんだな……。

しかも、2発と同じ位置に投げるなんて……

不意に、隣ののほほんさんが、ノートに何か書き込んでコッチに見せてきた。

『さっきー、だいじょーぶ？』

のほほんさん……心配してくれて、ありがとうございます。

さすがに、声に出して伝えられないんで、のほほんさんと同じくノートに『心配してくれてありがとう』と書いて見せることにした。

「ああ、そういえばクラス代表を決めなくてはいけなかったな」

突然、織斑先生が思い出したかのように語り始める。

クラス代表か、成る奴はご苦労様だな。

「クラス代表とは、対抗戦だけでなく生徒会の開く会議や委員会への出席：まあクラス長だと思ってくれていい。自薦、他薦は問わない。誰かいないか？」

「はい！織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

一夏よ、その俺以外なら誰でもいい、って顔をしないほうがいいぞ。だって、推薦されてるのお前だぞ？

「それじゃあ、わたしはさっきを推薦します！」

ちょー！のほほんさん！？俺を推薦しないでくれよ！！

一夏もその大変だな、って顔しない！お前も推薦されてんだからな！？

「では、代表者候補は織斑と咲坂でいいな」

「お、俺！！？」

あ、やっと気付いたのか。

はあ…めんどくさい事になりそうだな…

「ちょ、ちょっと待った！俺そんなのやらな…」

「自薦他薦は問わないといった。他薦された者に拒否権などない。もちろん貴様もだ、咲坂」

「はあ…なんとなくですけど、解ってましたので別に拒否しませんよ」

「いさぎいいな。他にいないか？いないなら、織斑か咲坂で決めるぞ」

「納得いきませんわ！！」

織斑先生が、俺が一夏で決めようとしたとき、パンツと机を叩く音と共にオルコットが大声で叫んだ。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

屈辱ねえ、聞くだけでイラついてくるな、これ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までISの修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！ いいですか！？ クラス代表とは実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、わたくしにとつては耐えがたい苦痛で……」

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「それとも、他国を侮辱するのが国の自慢か？」
「なっ……！！？」

さすがに、俺もこれ以上耐えられなくなったときに、一夏もどうやら我慢の限界のようだった。

でも、一夏よ。発言後のそのやつちまった、って顔するな。そんな

顔思いつきり、場違いだぞ。

「あ、貴方たち！わたくしの祖国を侮辱しますの！！」

「先に侮辱したのはそっちだろうが。少しは自分の発言思い返せ」

「ッ！決闘ですわ！」

またも、強く机を叩くオルコット。

いいぜ、その案に乗ってやる！

「いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言つとくが、相手が女だろうと容赦しないぜ」

「当たり前ですわ！もしもわざと負けようなどとすれば、貴方たちをわたくしの小間使い…いえ、奴隷にしてやりますわ！」

「侮るなよ。真剣勝負に手を抜くほど、俺たちは腐ってねえ！」

「そう？ 何にせよちょうどいいですわ。イギリスの代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

コイツ、完璧に俺たちの事を侮ってやがるな。
だったら、俺たちの男の力を見せてやるぜ！

「なあ、一夏？こう言う奴を黙らせるの、面白くないか？」

「ああ！俺たちの力を見せてやるうぜ、誠！」

俺の挑発に、一夏も乗ってくれる。最も、気付いてるかは別だが…俺たちの挑発のおかげで、オルコットの顔はもうりんごのように真っ赤になっている。

「さ、咲坂くん。さすがに謝った方がいいよ」

「そ、そうだよ。相手はイギリスの代表候補生だよ。ISの絶対防

御だって完璧じゃないって聞くし…危ないよ！」

「悪いけど、謝る気は無い。それに、オルコットは代表候補生だ。どうせ専用機とか持ってたんだろ？なら、専用機同士で戦ってやるさ！」

俺の発言で、織斑先生と山田先生も含めほとんどが驚く。……ちなみに、例外として一夏は驚いてないくらいだ…後で、専用機について教えてやらなくちゃな…

「……咲坂。貴様、今の発言は自分が専用機を持っているように聞こえたが」

「言葉通りですよ。俺も専用機持ちです」

そう言つて、俺の専用機の待機形態である竜のようなマークがついている腕時計を見せる。

このISは亡くなった兄さんが遺していった、兄さんの形見でもある。

こいつが、ブイモンを除いた俺の相棒だ！

「あ、貴方も専用機持ちでしたのね！？……いいですわ！わたくしの専用機『ブルー・ティアーズ』が完膚なきまでに叩きのめしてあげるわ！！」

「…話は纏まったな。それでは勝負は一週間後に行なう。各自、準備をしておくように！……咲坂は放課後、職員室に來い、いいな」

はあ…どうせ後でこうなると解ってたけど、やっぱりコイツについて呼び出しをくらったよ…トホホ

*
*
*

放課後、IS学園のある部屋にて薄暗い中、3人の女性徒たちが集まっていた。

その部屋には、大きな長机が真ん中に置いてあり、窓側で長机から少し離れた所に机が置いてある。

少女たちは、一人が離れた机の席に座り、もう一人がその隣に立っている。そして、最後の一人は扉の前に立っている。

「いじょーで、さっきーと織斑くんとオルコットさんが、戦うことになったの」

「ありがとね、本音。よく解ったわ」

「さて、どうしますか、お嬢様？」

「そんなの決まってるわ。その戦いが終わった後に、私が彼と接触するわ」

そう言っ、お嬢様と呼ばれた少女は扇子を広げる。扇子には『単独行動』と書かれていた。

その発言に、一人は溜め息をつき、もう一人はただ笑っていた。

「咲坂 誠…彼とは、絶対に接触しなくちゃね…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4723z/>

IS～ロスト・エヴォリューション～

2012年1月9日22時47分発行